

企業者概念の再構成

—予備的考察—

的場 信樹

Reconfiguration of the Entrepreneur Concept: A Preliminary Consideration

Nobuki MATOBA

Abstract

In this article, we present a necessary problem for the reconfiguration of the entrepreneur concept of Schumpeter. At that time, we research J.S.Mill's core thinking associated with the economic dynamics and utilitarianism. This is because Schumpeter criticized the classical economists from the standpoint of the falsificationism.

I. はじめに

シュンペーター (*J.A. Schumpeter*) のイノベーション論の核心が、初期の企業者 (*entrepreneur*) から、のちに大企業 (*big firm*) に変化したことの意味を問うことが本稿の課題である。イノベーションにおいて大企業の研究開発の役割が大きくなるという立論ののちに「シュンペーター仮説」として注目されるようになり、これがP・F・ドラッカーやマイケル・ポーターをはじめとする経営学の研究やクリストファー・フリーマンらの科学政策研究などに多大な影響を及ぼすことになった。その後のイノベーション研究は、基本的に、この「シュンペーター仮説」の延長線上にあるといっても過言ではない。一方、企業者機能は、A. Zalesnik のリーダーシップ論やG. ザルトマンの組織論などの形で研究が行われている。これらの研究はさらに行動理論や社会心理学など分野を超えて拡大しており、いまや総じて企業者概念は拡散し霧消してしまっているようにさえ見える。こうした研究状況において改めてシュンペーターの企業者概念を位置づけなおすことが必要になってきている。本稿では、シュンペーターが企業者概念を変化させていった過程に注目して、それに重要な役割を果たした「ブルジョア精神の社会化」にかかわる論点を整理し、企業者概念の再構成に寄与することを目的としている。

シュンペーターは『経済発展の理論』（初版は1912年、本稿では1926年の第2版を使用している）において、資本主義とは本質的に内生的な経済変化の過程であって、その内生的経済変化をもたらす推進力が新結合（イノベーション）であり、その原動力である企業者は単なる経営者とは違い、他人の判断から独立し、自ら喜びとなる仕事を創出しその喜びを自ら確信することができる特別で稀有な存在だとして、「超越的人間」、「新結合を行うただ者ではない企業者」のイメージが形成された。これにたいし、『資本主義・社会主義・民主主義』（1942年）では、創造的破壊（イノベーション）は主に大企業の内部で発生することになるので、失敗はそれほど危険ではなくなり、多数の技術者や専門家を動員することにより抵抗や障害は軽減され、その結果企業者機能の重要性は減少していくとされた。企業者機能が後退し代わって登場するのが、「享楽的人間」、「単なる管理者」、「典型的な実業家」といった功利主義的人間像であった。シュンペーターは本書の中でこの功利主義的人間について繰り返し考察しているが、そのことの意味を問うことによって企業者概念の再構成に結び付けていきたい。

したがって、本稿では、シュンペーターの企業者概念と功利主義との関係性について考察する。シュンペーターは社会の原動力として人間行動の動機を重視しているが、功利主義的な動機については社会的決定論として批判し、その際 J.S. ミルをはじめとする功利主義者について言及している。シュンペーターは反証主義の立場からミルや古典派経済学者にたいして積極的な批判を行っている。本稿を、シュンペーターのミル批判の検討からはじめる理由もここにある。これによってシュンペーターの論理の運びをたどることが容易になると考えるからである。

II. シュンペーターによる J.S. ミル批判の要点

シュンペーターによる J.S. ミル批判は、資本主義のビジョン、経済学の方法そして経営管理者論にかんして行われた。ミルの資本主義のビジョンは「定常社会論」として知られているように、産業の進歩によって資本や人口が増加し、農業では収穫逓減の作用が現れ労働コストが上昇することによって利潤率を低下させ、それが利潤の最低限に達することで資本主義は定常状態 (*stationary state*) に移行するというものである (馬渡 324)。この定常社会論にたいしてシュンペーターは、ミルをはじめとする古典派経済学者が、資本主義がダイナミックに変化する現実を直視していないこと、農業における収穫逓減という古い理論に依拠していること、人口増加という外的要因が理論上重要な役割を演じさせられていることを批判した (MacCraw 43、456、マクロウ 50、542)。ミルらの資本主義のビジョンは総じて悲観的で、その意味で静態的であるだけでなく、経済学の静態論としても欠陥があるというのが批判の要点である。

この批判は、経済動態学という自分自身の経済学の性格にかかわっているので、シュンペーターとしても曖昧にできなかった。シュンペーターにとって資本主義とは、本質的に内生的な経済変化の形態であり、変化こそ資本主義の本質である。そして、内生的経済変化をもたらす経済の推進力がイノベーションであり、その推進力をつくり出す資本主義的生産の原動力がこれまでのどの経営管理者のモデルにも当てはまらない企業者であった。シュンペーターがこう

した資本主義の動態を「本質的に内生的な変化の過程」（MacCraw270、マクロウ 315）として把握したのにたいし、ミルらは静態論を分析方法として用いるだけでなく、分析の目的である資本主義の「将来の現実」（＝静止状態）にしてしまったという批判である。

シュンペーターにとって曖昧にできない論点がもう一つある。それは、古典派経済学者が「個人の自発性の要素」を考慮に入れていないという問題である（MacCraw546、マクロウ 542）。経済学では個人は「個人主義的に行動する」ことが想定された方法論的個人主義モデルとして取り扱われるか、あるいは階級等に還元されて個人の自発性が問われることはないものとして取り扱われてきたのにたいし、シュンペーターは自発的に行動することだけを本質とする個人を企業者として登場させた。企業者概念は「個人主義的に行動する個人」あるいは「享樂的人間」に對置され、「自発的に行動することだけを本質とする個人」と定義されたもう一つの経営管理者モデルにはかならない。こうした人間類型に対応する資本主義のビジョンが「本質的に内生的な経済変化の形態」としての資本主義であり、その推進力は次のようなものである。生産は財や力を結合することであり、生産し消費するという経済の本質から、この結合が年々変わらない周期で繰り返し同じ客観的状况をつくり出すことが必要とされるが、突然この循環が断たれ財や力の結合が更新されることがある。生産物や生産方法の革新とは、このように財や力の結合が更新されることである。シュンペーターは「新結合が非連続的にのみ現われる限り、それを新結合の遂行 (*Druchsetzung neuer Kombinationen*) と定義する」(① 100, 182) としている。この「新結合を遂行する場合にのみ」企業者は企業者となる。

企業者概念にかんして古典派経済学批判を行う際に、シュンペーターはミルにたいして比較的慎重な態度をとっている。カンティヨンやセイは企業者の独自の機能に注目したが、リカードやマルクスは資本家概念に後退した。J.S. ミルだけが企業者の機能を、監督、統制、指示にあるというところまで分析を進めたが、ここで止まってしまい、企業者とリスク負担者（資本家）を同一視したために、企業者を所有者、経営者、銀行家などから区別することができなかった。シュンペーターの評価は、ミルは企業者の独自の機能に注目したがそれを理解することができなかった、それが古典派経済学の限界だった、というものである（MacCraw458、マクロウ 544）。企業者は新結合を遂行する上で重要な役割を担う概念なので、次にこの点をみていくことにする。

企業者概念は、シュンペーターの場合、機能と属性の両面から考察されている。さらに企業者機能は「新結合を遂行する」という本質的機能と、それに必要な要素機能に分けられる。分業社会においては、新結合を実現するために、他人に影響を行使する指導という機能が必要とされる。ほかに、他人とは違う別の可能性を発見し、不確定なことや抵抗を排除して前進することができ、権威、圧力、「人を服従させる力」といった機能があげられている。これらはいずれも一括して「精神的自由」(① 126, 226) の領域に含まれる要素機能とされており、企業者に固有の属性はこれらの機能を反映している。

こうした機能を遂行する企業者には固有の属性が存在するということが、『経済発展の理論』の強調点であった。そしてここでは、「享樂的人間」と「精力的人間」という類型化を行っている。

重要なので本文から引用しておく。「典型的な企業者というものは、自分の引き受ける努力が十分な『享楽剰余』を約束するかどうかを問うものではない。彼は自分の行動の快樂的成果を気にかけない。彼は他になすべきことを知らないために、たえまなく創造をする。彼は獲得した物を享楽して喜ぶために生活しているのではない」(① 137,244)。精力の人間は、ウェーバーのカルヴィニズム的世俗内禁欲との関連を想起させるものであるが、シュンペーターの類型化論においても目的論と合理化論が重要な役割を果たしており、合理化を遂行するパトス(動機)が重視されている。

シュンペーターは企業者行動の動機として3点をあげている。第1に、自由に権力を行使することができる自分自身の世界の実現という意味の「自己の王朝の建設」という動機である。これは「消費者満足に最も近いものである」(① 138, 246)と指摘されているように、財や力の獲得によって得られるということが強調されている。そして第2に、「勝利者意志」をあげている。シュンペーターはこれをさらに闘争意欲と成功獲得意欲に分けているが、これらはいずれも経済的な範疇とは異なり、より一般的な、経済的規準や法則とは関係の薄い動機とされる。第3に、「創造の喜び」という動機をあげている。これは仕事にたいする喜び、新しい創造それ自体にたいする喜びであって、つねに余力をもって活動に参加し、変化と冒険というまさに困難そのものを喜びとし、活動に猪突猛進するタイプの人間として描かれている(① 138 - 139, 247)。

シュンペーターは、上の3つの動機のうちで第1のものだけが、企業者活動の成果としての私有財産がその実現のための必要条件となっていて、あとの2つについては、他人の判断から独立していて、行為者が自ら喜びとなる仕事を創出し、その喜びを自ら確信するような動機であるとしている。第1の動機は、運か努力があれば手に入れることは可能かもしれないが、あとの2つはこうした人格が実現できるかは文字通り予測不可能であり、手に入れることができたとしても、それは稀有なことなのだとされている(① 137 - 139, 245 - 247)。このような人間類型がニーチェの「超人」概念そのものにほかならないという指摘がある。森嶋通夫は、シュンペーターの企業者概念がニーチェの何らかの影響のもとに形成されたことは否定できないとしている。シュンペーターが通常の経営者とは区別される独自の企業者の精神性を強調していることはこれまでみてきた通りであり、森嶋のいう「新結合を行うただ者ではない企業者」や「ニーチェ的な英雄主義の世界」(森嶋 60 - 61)という評価が企業者像としてほぼ定着している理由も理解できる。しかし、ここで注意したいことは、二人が二項対立的状況を創出しこれを修辞法の一部として用いていること、その結果概念が比喩的に定義され多義的解釈を可能にしていることである。

以上、シュンペーターがJ.S. ミルの定常社会論を批判しつつ、自分自身の資本主義のビジョン、経済学の方法、経営管理者論を積極的に展開していること、また変化こそ資本主義の本質であって、その推進力がイノベーションであり、これらを把握するためには独自の動態学を必要とするが、それは独特の企業者概念を基礎とするものだという主張をみてきた。とくに、独自の社会哲学に基づいて創造された「つねに余力をもって活動に参加し、変化と冒険というま

さに困難そのものを喜びとし、活動に猪突猛進するタイプの人間」の超越的性格が確認できた。次に、企業者概念の再定義の意味を考察するために、再定義を必要とする要因である資本主義の変化について検討する。

Ⅲ. 資本主義に生じた変化の性格

シュンペーターは『資本主義・社会主義・民主主義』において企業者概念の再定義を行っているが、再定義が必要になった理由とその目的については、本書から7年後の1949年に刊行された論文「経済理論と企業者史」において概括しているので、まずこれからみていくことにする。企業者概念の再定義が必要になった理由として、まずあげられているのは資本主義の変化である。この変化の性格を問うことを本章の目的とする。

シュンペーターは、当該論文において、批判の対象である J.S. ミルの定常社会の出現を認めている。定常状態という概念が有用になってきた。しかもそれは遠い将来のことではなく今まさに直面する現実である。アメリカ経済が未曾有の成長を遂げている中であっても、シュンペーターは前途を楽観してない。「前例のない『進歩』という新しい時代が目前にあることを、あらゆるものが示している現在、この点について大いに心配する必要はないと考えうるかもしれない。しかし私は、この問題と、それに対する歴史のかかわりを完全に見過ごしていいとは考えていない」(⑧ 263、129 - 130)。じじつ、シュンペーターは、この定常状態への移行を歴史的進化の過程として取り扱っている。

もう一つの理由は、より差し迫った問題で、ケインジアンの影響力の拡大である。投資機会の消滅とそれを上回る貯蓄性向によって、資本主義システムを維持するためには政府の赤字財政支出が不可欠だというケインズ理論への支持が広がっていた。シュンペーターはこれにたいして何らかの対応が必要だと考えていた(同上)。それがケインズとは違う方法で定常状態への移行を説明できる理論を構築することであった。ただし注意しておかなければならないことは、シュンペーターは最後まで、『経済発展の理論』で明らかにした資本主義のビジョンも経済学の方法も変える必要を認めていなかったということである。たとえ資本主義が長期的には停滞状態 (*stagnation state*) に入っているととしても、資本主義の本質は変わっていないのだから創造的破壊によって変化し続けるしかない。そのためにはイノベーションの中心が大企業に移ってきた現実を認める必要がある。ただし、そのためには、こうした現実を資本主義の内生的要因の変化から理論的に把握しなおさなければならない。この課題にこたえるために編まれたのが『資本主義・社会主義・民主主義』であった。

次に、資本主義の内生的要因の変化について考察する。シュンペーターは、本書に先立って、1928年の「資本主義の不安定性」という論文の中で「競争的資本主義」から「トラスト化された資本主義」への移行の問題を検討し、競争の形態と機能について新たな視点を提起しているので、本稿での考察も改めてここから出発することにする。この論文から、シュンペーターが資本主義の変化という問題にかなり早い時期から関心をもち、考察を行っていたことがわか

る。考察の中心は競争と市場に生じた変化である。

シュンペーターによれば、資本主義の発展過程が、競争的資本主義から「トラスト化された資本主義」に移行すると、イノベーションの形態が変化し、それにもなって企業者機能も変化する(②70-71, 130-131)。それ以前の競争的資本主義におけるイノベーションは、典型的には新しい企業の設立という形で具体化されるのであるが、それは古い企業から成長してこないで、むしろ古い企業と併存しつつ、古い企業にたいして熾烈な生存競争を挑む、という動的な過程である。とはいえ、信用力を欠き、開発部門を設置する余裕のない小規模な企業にとってイノベーションは、莫大なエネルギーと勇気が要求され、極端に危険で困難な仕事でもある。しかし、こうした事情は「トラスト化された」資本主義では異なってくる。イノベーションは、新しい企業の設立を必要とせず、すでに存在している大企業の内部で発生する。そのため、失敗はそれほど危険ではなくなり、技術者を動員し専門家のアドバイスも得られるので、変革にともなう抵抗や障害は軽減される。大企業では、需要動向に配慮した慎重な政策と投資を考慮した長期的視野をもつことが可能となるし、信用創造の重要性は依然として変わらないとしても、豊富な準備金と資本市場での資金調達が可能であることによって、企業者機能の重要性は減少していく傾向にある、というものである(②70-71, 131)。「進歩は『自動的』で、次第に非人格的になり、独自のリーダーシップと人間類型の問題ではなくなっていく」(②71, 131)。これはさまざまな点で根本的な変化をもたらすが、企業の成功と役職における地位が基本的に一致するという指導者の選抜システムも消滅する。こうしてリーダーシップの性格も変化し、それに伴って企業者機能も変化する。

以上が、経済発展によって競争に生じた変化とイノベーションの形態に生じた変化にかんするシュンペーターの考察である。『資本主義・社会主義・民主主義』は、これらの変化の本質を、資本主義の内生的要因の変化を分析することによって体系的に明らかにすることを目的としている。本書では、この資本主義の変化という論点は、第2部資本主義論の第8章「独占企業の行動」、第10章「投資機会の消滅」、第11章「資本主義の文明」で主に取り扱われている。ここではまず、競争と市場に生じた変化についてシュンペーターの論旨をたどっていくことにする。

シュンペーターは、「競争的資本主義」といっても現実には完全競争が行われているわけではなく、一方で競争を通して大企業が登場し高価格や生産制限といった状況が現れてくるが、しかしこれも経済にとっては一定時点の瞬間的な現象に過ぎない、という。企業にとってこの瞬間は過去から未来に向かう過渡期であって、変化する市場にどのように対応するかの判断が常に求められている。したがって、企業活動の動機にとっては利潤極大化より予測不可能性という圧力のほうが重要である。シュンペーターが、「足下からくずれ去ろうとしている地盤に立ちながら、何とかしてまっすぐに歩こうとしているこれらの企業の試み」(⑨84, 131)と描写しているのはまさにこの点を衝いている。

次に、シュンペーターは、「新企業や新投資のために開かれた機会」は存在するのかという問題(⑨113, 176)を考察する。投資のための機会が消滅しつつあるとする主要な根拠として、

市場の飽和状態、人口増加率の低下、新しい土地開発・改良の技術的可能性、そして多くの既存投資機会が私的投資よりはむしろ公共投資の領域に移行しているという市場の変化を取り上げて検討を加えている。

出生率の低下ないし、さらに進んで人口の絶対的減少が、補填投資以外の投資機会を減少させる重要な要因となることはシュンペーターも認めている。なぜなら、もしあらゆる人の欲望が満たされれば、そのときには消費者の増加のみが需要増加の唯一の源泉となるからである。しかし、シュンペーターは「人口増加率の低下は、それだけでは、投資機会や一人あたり総生産量増加率を危うくするものではない」（⑨ 114、177）としている。その根拠としては生産性の上昇や新市場の発見などがあげられるが、本文の注において「それが今考察している期間に生ずるとは思われなからである」（⑨ 113、177）という理由をあげている。資本主義の停滞状態への移行はありうるかもしれない。しかしそれは、いつになるかわからない先のことだというのが、この問題に関するシュンペーターの基本的立場である。

市場問題に関連して、新しい投資機会が私的企業よりも公共的企業のほうに適しているという主張も検討の対象としている。シュンペーターはこの主張を概ね妥当としている。第1に、富の増大とともに、都市美化や公衆衛生等への支出など「利潤計算にはいらぬような支出」が定着してきており、第2に、通信手段、ドック、動力生産、保険といった広範な産業部門が公共的管理の領域に入る傾向が認められるからである。こうして、国家や地方自治体の投資が、資本主義経済においてさえ、絶対的に拡大するものと期待できる（⑨ 120、186 - 187）としている。

以上のような資本主義の変化の性格について、シュンペーターは次のように総括している。産業の寡占化が進み、大企業が登場し、費用や品質において決定的な優位を占めることによって既存企業の基礎や生存自体をゆるがすような競争が繰り返され、この種の競争における大企業の役割が大きくなる。大企業は自らの産業戦略に基づいて新製品や新生産過程（アルミニウム産業）の導入や産業の再編成（旧スタンダード石油株式会社）を遂行している。また、投資機会は公共部門において拡大している。しかし、これらの事実は、「資本主義過程は封建社会の制度的枠組みを破壊したとまったく同じ仕方で、資本主義自体の骨組みの土台を切りくずすこと」（⑨ 139、218）と変わらない。つまり、資本主義の成功によって資本主義は死滅に向かって停滞状態へ移行しつつある。しかし、ケインズのような「停滞主義たちは、資本主義的過程がなぜ停滞しなければならないかという理由の診断において誤っている。けれどもそれが一公共的領域からの十分な援助とともに一停滞するであろうという予断においてはなお正しいものと認定されるようになるかもしれない」（⑨ 425、681）。資本主義の変化は循環的なものではなく、死滅に向かう一方通行的な性格をもつというのが、この問題にたいするシュンペーターの理解である。つまり、J.S. ミルやケインズと、接近方法は違っているとしても停滞状態は免れられないという一点において結論を共有していることになる。それでは、次に、章を改めて「資本主義的過程がなぜ停滞しなければならないかという理由」を検討する。

IV. 停滞状態への移行の根拠

理論的研究とは対象の内生的要因から現象の本質を理解することであり、人口問題のように外部から挿入した根拠によって現象を説明することはルール違反だというのがシュンペーターの主張であった。『資本主義・社会主義・民主主義』において、資本主義が停滞状態へ移行する内生的要因としてあげられているのは、競争や市場という要因とは別のブルジョア社会の基礎に起きた変化であり、具体的には、小生産者の弱体化、株式会社制度、大規模組織における官僚制といった法律や政治制度や家族制度の変化である。ここで注目されるのは、『経済発展の理論』では強調されていた個人の役割が後退し、代わって階級や家族や組織の役割が強調されていることである。

シュンペーターはブルジョア階級を、資本の所有者であり生産力の担い手、共通の文化的紐帯をもち階級を形成するが、ほかの社会階層の擁護がなければ政治的には無力な存在として描いている。企業者はそれ自体で一つの社会階級を形成するものではないが、成功の暁にはブルジョア階級に吸収され一体化する。ブルジョア階級は直接的または間接的に企業者に依存している。「ブルジョア階級は企業者に依存し、階級としては企業者と生死をともしにする」(⑨ 134, 209)。しかし、現実には、「企業者の社会的機能はすでに重要性を失いつつある」(⑨ 132, 207)。その理由として2つのことが指摘されている。技術進歩によりイノベーションが専門家の仕事となり、進歩自体も予測可能になってきた結果イノベーションが日常業務になってきたこと。そして、人々が経済変化に慣れてしまったために、変化することに抵抗感がなくなってきたことである。これらの背景には、経済発展自体が非人格化され自動化され、官僚機構での仕事の仕方が個人の仕事の仕方にとって代わりとうとする社会の変化がある。次にこれらをより詳細に検討する。

シュンペーターは人間の動機を重視するのと同様に、階級意識や道徳観念を社会の原動力として注目する。資本主義の発展は、競争の結果と生活の合理化によって、不可避的に小生産者のよって立つ経済的基盤を掘り崩していく。これは、シュンペーターのいうように、「資本主義過程は前資本主義的階層にたいして行ったことを、…下層の資本主義的産業にたいしても行う」(⑨ 140, 218) だけなのであるが、資本主義の政治構造は、多数の中小企業が排除されることによって深刻な打撃を受ける。なぜなら、中小企業の経営者は、その家族と関係者まで含めると、投票において量的に重要な意味をもっており、ブルジョアの道徳観念においてもっとも活発、堅固であり、意味の大きい影響力を失うことになり、「私有財産や自由契約の基礎そのものが失われていかざるをえなくなる」(⑨ 140 - 141, 220)。

資本主義の発展は、シュンペーターによれば、大企業の活動を通して自らの制度的骨組みである「私有財産」と「契約の自由」の意味を変える。所有者的な形式とともに、とくに所有者的な利益が失われてしまった結果、大企業の役員や支配人層は被雇用者の態度をとりがちになり、大株主はもともと意識や機能において所有者には及ばないし、小株主は大企業や資本主義的秩序にたいして場合によっては敵対的な態度をとることも厭わない。結局、これらの階層は

「私有財産」という言葉によって代表される「特有の態度」（⑨ 141、220）をとらなくなる。シュンペーターは、法律による労働規制についても、契約の自由を無力化し、ひいては貯蓄し投資する意欲を社会から失わせると考える。シュンペーターは、私有財産にたいする社会の反発や抑圧、その弱体化自体が、資本主義過程の崩壊を説明するのにふさわしい要素であり、この要素が人口問題のような「投資機会消滅の理論」によって示されたどの要素よりもはるかに重要なものだと考える。ブルジョア精神は外からの力によって脅かされるばかりでなく、内的原因によってもまた死滅する傾向をもつとし、両者の相互依存関係をみておくことが重要だと指摘する（⑨ 156、245）。

この資本主義の変化の内的要因の一つとして、シュンペーターが「財産の実体の霧消」と呼んでいるものがある。現代の実業家は、企業者であるか単なる管理者であるかを問わず、執行者タイプの間人である。このような人は、大組織の中では官僚機構のなかで働く被雇用者のような心理をもつ。自己の地位のために闘ってそれを持続しようとする意志は、かつての所有権や責任というものの実感をもっていった人のような意志ではもはやない。その価値体系や義務観念は深刻な変化をこうむる。また、単なる株主という資格だけでは、いまや問題にならない。こうして近代的な株式会社は、それ自体資本主義の発展過程の産物でありながら、ブルジョア精神を社会化し、同時に企業者機能を社会化する。すなわち、近代的株式会社は「仮借なく資本主義的動因の活動範囲をせばめる。それだけではない。ついにはその根源をも殺してしまうであろう」（⑨ 156、246）として、シュンペーターはマルクスの「労働の社会化」論を再現しようとしている。ブルジョア精神の社会化、これは資本主義の文明化作用と同様に資本主義の成果にほかならないのであるが、このブルジョア精神の社会化によってイノベーションの可能性が決定的な影響を受けた、というのがシュンペーターの主張である。

さらに、いっそう重要な内的要因がある。それはブルジョア家庭の崩壊である。シュンペーターが注目しているのは、現代社会においては、「家庭生活や親子関係は以前ほどの意味をもたず、したがって生活態度の型を生み出す力も弱くなっている」（⑨ 157、246）ことである。全然子どものいない、あるいは一人しか子どものいない夫婦の比率は増加傾向にある。今ではこのような現象が多かれ少なかれあらゆる階級に広がっている。けれどもそれが最初に現れたのはブルジョアと知識人の階層であって、それが生活全般の合理化に基づくものであり、この合理化が資本主義発展の結果に過ぎないことは明らかである。「事実それは、その合理化が私生活の領域にまで拡大したことの一つの結果にほかならない」（⑨ 157、247）。これは、人々が功利主義の影響を受け、伝統的様式（*the traditional arrangements*）を当然のものとしては受け入れなくなったこと、自分の行動が影響を及ぼす未来における個人的利害を考慮するようになったこと、家族に縛られることや親子関係から生ずる個人的犠牲が重いと感じられ、子供はもはや経済的資産ではないと自覚されるようになったことを意味する。

以上のことが、企業者機能にとってどのような変化をもたらすのかということを理解するには、家族が典型的にブルジョア的な利潤動機の主導力であったということ想起する必要がある。いわゆる企業者や資本家の利己心という観念と、それがもたらすと期待された結果は、も

はや家族を通して世界を見ようとはしない孤立した個人や子どものいない夫婦の合理的利己心から予期される結果とは、まったく違うものである。意識するかしないかは別として、実業家は、家庭によってその見方や動機が形成され、またなによりもまず妻と子どものために働きかつ貯蓄しようとする。しかし実業家の道徳的観念の中からこうしたものが後退していくにつれて、「別の事柄に関心をもち、別の仕方で行動する別種の経済人 (*homo economicus*)」(⑨ 160、251) が登場する。個人主義的功利主義の立場からすれば、かつてのような古い道徳や行為はまったく非合理的なものである。こうして、「彼は、非ロマン的かつ非英雄的な資本主義文明に残されていた唯一のロマンスと英雄主義を喪失する。いまや彼は、自ら収穫物を取り入れるか否かを問わず、ただ将来のために働くことを命ずる資本主義的倫理をも喪失するにいたる」(⑨ 160、251 - 252) のである。

社会の長期的利益はブルジョアジーの階層に委ねられてきた、というのがシュンペーターの主張である。それはまた、この階層の家族動機に委ねられている。ブルジョアジーはなによりもまず貯蓄し投資するために働いた。家族動機の提供していた推進力の衰退とともに、実業家の時間的視野はだいたい自分の一生程度に縮小する。そうなれば人は、稼ぎ、貯蓄し、投資するという機能を果たすことに昔ほどの熱意を示さなくなる。これにたいしてシュンペーターは、「彼は反貯蓄的な気分へ落ち込み、短期的哲学の印たる反貯蓄理論をますます安易に受けられるようになる」(⑨ 161、252) として、ケインズ革命の支持者を批判する。

以上のように、資本主義が停滞状態へ移行するのは、科学技術の発展や大企業の成長といった要因にとどまらずブルジョア意識が後退することによって企業者の動機が変化するからである。企業者の動機の変化は、経済の推進力であるイノベーションの形態が、大企業の技術者や専門家によって日常的業務として遂行されるものに変化したからでもある。ブルジョア精神が社会化することによって、短期的利害にとらわれることなく、稼ぎ、貯蓄し、投資するという私的所有に結びついていた意欲（「特有の態度」）がブルジョアジーの存在とともに消滅し、功利主義的精神がこれに取って代わる。これも企業者機能の衰退につながる。こうして、企業者概念も変化する。最後に、企業者概念が変化したことの意味を次章で検討する。

V. 企業者概念の変化とその意味

本章では、シュンペーターの企業者概念が変化したことの意味を考える。ここでは、まずシュンペーターが1947年の「経済史における創造的反応」という論文でイノベーションの特性としてあげた3点を確認して、それらがどのように変化したのかを整理する。3点は、①「事後的には理解できるが、事前には絶対といっていいほど理解されない」というイノベーションの予測不可能性、②「社会と経済状況を恒久的に変化させる」というイノベーションの断絶性、③「個人の決定、行動、活動パターンに明らかに関連している」(④ 222、88 - 89) とされるイノベーションの担い手の超越性の3つである。

この3つの特性は、シュンペーターがJ.S. ミルの定常社会論を批判するときの根拠と対応し

ている。①の予測不可能性は、古典派経済学の方法論としての静態学が予測可能な循環運動しかみていないという批判に、②の断絶性は、ミルが定常社会への移行を新たな均衡に向かおうとする連続的变化としかみていないという批判に、③の担い手の超越性は、古典派経済学者は「個人の自発性の要素」を考慮に入れていないという批判にそれぞれ対応している。シュンペーターのミル批判は、イノベーションの特性である予測不可能性、断絶性、人格の超越性という要素をすべて欠いていることへの批判として行われた。シュンペーターは、ミルらが経済の内生的要因の分析に基づいて理論的に定常社会への移行を主張していないことを指摘したが、同時に理論自体にも制約や限界があったという批判を展開している。なお、古典派経済学者は「個人の自発性の要素」を考慮に入れていないという批判については、シュンペーター自身は企業者精神に関する研究は経済学の範疇を超えているとして経営史学への期待を表明（⑤参照）する一方、「このような問題は、経済学そのものよりも、歴史学や『経済社会学』の領域である」（MacCraw471、マクロウ561）とも考えており、当時支配的だった経済学全般にたいする批判とみることができる。それでは、この3つの特性がどのように変化したとシュンペーターは考えていたのかということを再度確認したあとで、その結論の意味を次に考察する。

先にみたように、シュンペーターは技術進歩の過程に注目して、イノベーションが大企業の中の技術者や専門家の仕事となり進歩自体も予測可能になってきたこと、その結果イノベーションが日常業務になり、かつ人々が経済変化に慣れてしまったこと、そして社会的過程にも注目して、より本質的な契機として個人化が進展し資本主義の精神が衰退した結果、企業者自身もそしてその社会的機能もすでに重要性を失いつつあることを指摘した。シュンペーターが当初イノベーションの特質としてあげていた3点はいずれもシュンペーター自身によって現代的意義が否定され、定義上イノベーションの形態は根底から変化し、資本主義は衰退の道をたどるほかなくなる。これがシュンペーターの理論的帰結であった。そしてイノベーション論は、「シュンペーター仮説」に代表される新しい段階に入っていくことになる。

シュンペーターはこの理論的結論を受け、『資本主義・社会主義・民主主義』において社会主義論の検討に入っていく。その目的は社会主義の可能性を明らかにすることであり、そのためにもまず民主主義論の検討からはじめている。社会主義の可能性は民主主義のあり方にかかっていると、生産力の管理の問題を民主主義論という形で検討している。ここで注目されるのは、J.S. ミルの功利主義的人間観へのシュンペーターの評価である。シュンペーターは本来、快楽の量によって物事の善悪を判断しようとするベンサム的な功利主義にたいしては、浅はかなものとして軽蔑していたとされる（楠木157）。本書においても、功利主義にたいして同様の評価であることがうかがえる文言が散見される（IV章参照）が、そこでの強調点は、主に、個人主義的、視野が狭く短期的といった人格特性である。しかしここで問題が発生する。功利主義といっても、J.S. ミルの場合ベンサムと違って「快・苦」の量だけでなく、その質の違いも重視する。つまり、「快・苦」の原因の中に利己心だけでなく同胞感情も含まれており、人間は他人に同情できるし、自分の利害をこえた他人の利害、さらには「最大幸福」についても配慮できる存在として考えられていて、個人主義といっても、いつも自己の利益を最大にする

ために行動しているわけではない（馬渡 350）。本書においても、ミルを慎重に評価しようとしているところがあるので、確認してみることにする。

シュンペーターは、本書の第4部社会主義論の第20章「問題設定」において、功利主義の基礎にある社会哲学について考察を行っている。シュンペーターは、功利主義は基本的に合理主義的・快楽主義的・個人主義的性格をもつものであるとしている。つまり、人間の幸福という目的とそれにふさわしい手段とについて明白な認識をもっている個人を設定し、この個人が追求する幸福増進こそ人生の目的であり、それが政治的領域であるか私的領域であるかを問わず、およそ人間活動の最高原理である、とするのが一般的に考えられる「功利主義」であり、これについてはベンサムもミルも違いはない。功利主義にたいするシュンペーターの理解は、「この社会哲学は、初期資本主義の産物であるが、それを J.S. ミルが発明した『功利主義』と名付けることができる。これによれば、この原理に準拠する行為は、ただ単に合理的で正当であるだけではなく、『自然的』なものである。この命題は、他の点では非常にかけ離れているはずのベンサムの理論とルソーの社会契約論との間に橋渡しをしようとするものである。ここにあげた二つの名前は、いまのところでは不明瞭のままに残しておかねばならぬ残余の点に対して、光明を投げかけるものとして有用たるを失わないであろう」（⑨ 248 - 249、396 - 397）というものであった。

シュンペーターはこの功利主義的人間観を、社会主義とそれへの過渡期における基本的な人間類型として、また同じく企業の管理者の人間類型として用いている。この点は本稿の目的である、企業者概念の変化とその意味を問うことに直接関連してくるので、詳しくみていく。シュンペーターは企業管理者の動機として、たとえ社会主義の下であっても利己的と利他的の両方の動機が必要だと考えている。利己的動機は報酬であり、利他的動機にはさまざまなものが考えられるが、いずれにしても利他的動機に過度に依拠するのは現実的でないとして、「社会的表彰や社会的名声というような形での若干の報酬体系が有効」だとしている。社会的表彰や社会的名声に独自の価値が存在することについては、「つねに経済学者の認めてきたところである。ジョン・スチュアート・ミルは、先見ないし洞察において特別な達人というわけでもなかったのに、それを認識していた。なにはともあれ、人並みはずれた成果を上げるための刺激剤のなかで、これがもっとも重要なものの一つであることは明白である」（⑨ 208、330）と、シュンペーターはミルを一定程度評価している。しかしこれ以上、経営管理者の動機の問題を考察することはしていない。

シュンペーターは、考察の最後にイノベーションの形態が変化したあとの経営管理者像として功利主義的人間類型に言及して、そこで企業者概念にかんするすべての検討を終えている。以上で、シュンペーターの企業者概念が変化を遂げていった過程を、主な論点について確認することができたので、最後にその意味を考えてみたい。

まず、シュンペーターがイノベーションの特性が変化したとする根拠についてである。その根拠としては、①予測可能性が増大したこと、②イノベーション自体が日常化し、かつ人々が経済変化に慣れてしまったこと、③企業者機能が社会化し、重要性が後退したことという要因

があげられた。このうちの①と②については、科学技術の発展によって、イノベーションが大企業の中で技術者や専門家によって遂行されるようになったこと、③については、それに加えて、大企業の中で企業家の機能が官僚的意識をもつ経営者によって担われるようになったことが根拠とされた。しかし、①と②であげられた根拠は説得力を欠いている。①について、シュンペーターは「イノベーションは……巨大な単位の範囲内で発生する。どのような場合にも、失敗は危険ではなくなり、当然、専門家のアドバイスにしたがって、実行される傾向があるので、それはほとんど摩擦を生じない」（② 70, 131）ことを根拠としているが、規模の拡大によって企業はリスクを回避しやすくなるかは一概にはいえないし、マイケル・ポーターが指摘しているように、大企業であっても「業界の競争的要因からうまく身を守り、自社に有利なようにその要因を動かせる位置を業界内に見つけること」（Porter11、ポーター 18）ができなければ市場から撤退しなければならないように、イノベーションの成否的中率が企業規模によって変化するということが実証されていない。「シュンペーター仮説」については異論が多く、むしろイノベーションの規模の経済性には否定的な研究が多い（西村・大西・真保、野方）。②については、人々が経済変化に慣れて新製品を抵抗なく受け入れるようになれば、むしろ断絶的变化が進みやすくなるし、そもそも断絶的变化かどうかは現代世代以降の人間が判断するので、現代の人間がその可能性を否定することはできないはずである。結局、イノベーションの予測不可能性と断絶性を否定する有力な根拠は示されなかったことになる。

そして③についても、シュンペーターはイノベーションの担い手が「超越的人間」としての企業者から功利主義的企業者へと変化したと主張しているが、これはシュンペーターの前提からすれば大企業だからこそいえることなので、「シュンペーター仮説」の妥当性が疑われている以上、「超越的人間」から「享楽的人間」（功利主義的人間類型）へ移行したという仮説には、にわかに同意し難い。「かつては天才のひらめきの中に描かるべきはずであったものが、今では精密に計算されるように」（⑨ 132, 207）になったという論理の意図を汲み取ることは容易ではない。これは、企業者概念が比喩的に定義されていること、そしてシュンペーターの功利主義批判が『資本主義・社会主義・民主主義』では未完のまま閉じられていることにも関連がある。「シュンペーター仮説」は依然として仮説のままとどまっているのである。

VI. おわりに

これまでの考察を通して、シュンペーターのイノベーション論の体系の中には積み残された重要な論点があることがわかった。シュンペーターは、イノベーションの核心が企業者から大企業に変化したという問題を提起し、その要因を考察した。その際、研究開発投資と組織的研究体制における大企業の優位性が立論の根拠となっているが、これを前提としたイノベーション概念を再構成するという課題には応えられていない。この課題には、イノベーションと改良の区別と関連をどのように考えるのかという問題も含まれる。また、企業者概念についてシュンペーターは、機能の変化を考察しその極小化を指摘した。その際、企業者機能の有用性の考

察にとどまり、イノベーションは自由な創造的活動であるという、当初は強調されていた企業者の自由性の問題は視野から後退している。なお、シュンペーターは J.S. ミルの功利主義が合理主義的世界観に与えた影響の有用性を評価するが、自由性には言及していない。企業者の自由という論点には、個人の独創性を抑圧しない社会のあり方を提起したミルの功利主義の視点も含まれる。ミルの自由論では、卓越した出来事は個性から生まれ、独創性は独創的でない人にも恩恵をもたらすが、それは独創的でない人も同様に成果を享受できるからだけでなく、違う意見が実行に移され、それらが比較され検証されることが人類の利益と合致するからだとして（馬渡 366）、独創的な個人の価値が擁護されている。

この世界は企業者の動機が変化したことによってイノベーションが衰退し停滞状態に入っている、というシュンペーターの「予言」は本当に現実のものになりつつあるのだろうか。パラドックスを駆使するシュンペーターの方法はイノベーションと経済成長の相関関係をめぐる現実の反映かもしれないのである。

経済成長のあり方だけでなく、その意味も問われている現在、イノベーション研究の深化とともに、シュンペーターの企業者概念の再構成が必要とされているが、本稿ではその際必要とされる最低限の論点を提示することができた。

引用参考文献

- 楠木敦（2012）「シュンペーターと功利主義」『経済社会学会年報』第34号
- 小沼宗一（2014）「J.S. ミルの経済思想」『経済学論集』（東北学院大学）第182号
- 塩野谷祐一（1981）「ミルの功利主義の構造」『一橋論叢』第86巻第5号
- 菖蒲誠（2013）「シュンペーターにみるリーダーシップ論」『立命館国際研究』26 - 2
- 杉原四郎（1980）『J.S. ミルと現代』岩波新書
- 中倉智徳（2014）「イノベーション論の批判的検討にむけて—発明の社会学からイノベーション・プロセスの経済学へ—」『生存学研究センター報告』21
- 西村陽一郎、大西宏一郎、真保智行（2005）「特許の質と集積の経済」Graduate School of Commerce and Management Center for Japanese Business Studies, Hitotsubashi University, Working paper ; No. 016
- 野方宏（2005）「イノベーション、企業および市場構造：シュンペーター仮説と最近の展開」『神戸市外国語大学外国語研究』62
- 藤谷忠昭（2000）『「市民」社会における『ニーチェ』的存在—自己の複数性と統治—』『ソシオロギス』No.24
- 馬渡尚憲（1997）『J.S. ミルの経済学』お茶の水書房
- 森嶋通夫（1994）『思想としての近代経済学』岩波新書
- 安井俊一（2003）「J.S. ミルの社会主義論とハリエット・テイラー」『三田学会雑誌』No.96、No.1
- 吉尾博和（2011）「シュンペーターの経済社会学と資本主義進化」『人文社会科学研究』第22号
- 鷺田祐一（2015）『イノベーションの誤解』日本経済出版社
- Christensen, Clayton M., (1997) *The Innovator's Dilemma*, President and Fellows of Harvard College、クレイトン・クリステンセン（2001）『イノベーションのジレンマ—技術革新が巨大企業を滅ぼすとき—』玉田俊平太監訳、伊豆原弓訳、翔泳社
- Cole, G.D.H., (1944) *A Century of Co-operation*, George Allen & Unwin Ltd., G.D.H. コール（1975）『協同組合運動の一世紀』（森晋監訳）家の光協会
- Drucker, Peter F., (1985) *Innovation and Entrepreneurship*, Harper & Row, P.F. ドラッカー（1985）『イノベーションと企業家』小林宏治監訳、上田惇生・佐々木実智男訳、ダイヤモンド社
- Freeman, Christopher, (1987) *Technology Policy and Economic Performance*, Pinter Publishers Ltd、クリストファー・フリーマン（1989）『技術政策と経済パフォーマンス—日本の教訓—』大野喜久之輔監訳、新田光重訳、晃洋書房
- MacCraw, Thomas K., *Prophet of Innovation: Joseph Schumpeter and Creative Destruction*, 2007、八木紀一郎監訳、田村勝省訳（2010年）『シュンペーター—伝—革新による経済発展の預言者の生涯—』一灯社。
- Mill, J.S. , *Principles of Political Economy with Some of Their Applications to Social Philosophy*, People's Edition, 1878、ミル『経済学原理』（末永茂喜訳）岩波書店、1961年。
- Porter, Michael E., (1980) *Competitive Strategy*, Free Press, E.M. ポーター（1995）『競争の戦略』土岐伸、服部照夫訳、ダイヤモンド社
- Schumpeter, Joseph Alois, ①（1926）*Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung*, 2. Aufl., J.A. シュンペーター（1977）『経済発展の理論—企業者利潤・資本・信用・利子および景気の回転に関する一研究』塩野谷祐一・中山伊知郎・東畑精一訳、岩波文庫
- ②（1928）*The Instability of Capitalism*, Economic Journal, Sept., Essays on Entrepreneurs, Innovations, Business Cycles, and the Evolution of Capitalism, Edited Richard V.

Clemence, J.A. シュンペーター (2001) 「資本主義の不安定性」『資本主義は生きのびるか』八木紀一郎編訳、名古屋大学出版会

③ (1928) *Unternehmer Handwoerterbuch der Staatswissenschaften*, J.A. シュンペーター (1998) 「企業家」『企業家とは何か』清成忠男編訳、東洋経済新報社

④ (1928) *Der Unternehmer in der Volkswirtschaft von heute*, Strukturwandlungen der Deutscher Volkswirtschaft, Ernst Band, J.A. シュンペーター (1998) 「今日の国民経済における企業家」『企業家とは何か』清成忠男編訳、東洋経済新報社

⑤ (1947) *Comments on a Plan for the Study of Entrepreneurship*, J.A. シュンペーター (2001) 「企業家精神の研究のためのプランへの論評」『資本主義は生きのびるか』八木紀一郎編訳、名古屋大学出版会

⑥ (1947) *The Creative Response in Economic History* (Journal of Economic History, Nov.1947) Essays on Entrepreneurs, Innovations, Business Cycles, and the Evolution of Capitalism, Edited Richard V. Clemence, J.A. シュンペーター (1998) 「経済史における創造的反応」『企業家とは何か』清成忠男編訳、東洋経済新報社

⑦ (1949) *American Institutions and Economic Progress*, J.A. シュンペーター (2001) 「アメリカの制度と経済進歩」『資本主義は生きのびるか』八木紀一郎編訳、名古屋大学出版会

⑧ (1949) *Economic Theory and Entrepreneurial History* (Harvard University Research Center in Entrepreneurial History, Chage and the Entrepreneur, 1949) Essays on Entrepreneurs, Innovations, Business Cycles, and the Evolution of Capitalism, Edited Richard V. Clemence, J.A. シュンペーター (1998) 「経済理論と企業家史」『企業家とは何か』清成忠男編訳、東洋経済新報社

⑨ (1950) *Capitalism, Socialism and Democracy*, Third Edition, The President and Fellows of Harvard College, J.A. シュンペーター (1995) 『資本主義・社会主義・民主主義』中山伊知郎・東畑精一訳、東洋経済新報社

Zaleznik, Abraham A., (1977) *Managers and Leaders: Are They Different?*, Harvard Business Review, May-June

Zaltman, Gerald, Duncan, Robert, Holbek, Jonny (1973) *Innovations and Organizations*, John Wiley & Sons, Inc., ジェラルド・ザルトマン、ロバート・ダンカン・ジョニー・ホルベック (2012) 『イノベーションと組織』首藤禎史、伊藤友章、平安山英成訳、創成社